

2009年度京生研基調提案

「みんなはひとりのために・一人はみんなのために」

～『K』との共生をめざす学級集団づくりと学校づくり～

—私はこう読む—

中川拓也

1 はじめに

滝花さんが、今年度の基調をつくるに当たり、過去にさかのぼって京生研の実践や全生研の文献・関連する文献を読み込み、基調の何倍もの覚え書きをつくっていることに、まず敬意を表したい。

私の与えられた課題は、「学校づくりを展望した学年づくり」についての、実践者としてのコメントである。

2 『K』を集団づくりの軸にすえた学年づくりについて

私が、学年づくりを意識したのは、若かりし頃の『K』たちとの格闘が根本にある。毎日毎日、『K』たちの問題行動の事後処理に追われ、明日の見通しもない中で、いつ教師を辞めようかと考えていた。そんなとき、多くの先輩方と出会い、「『K』の変革は、社会を変革することにつながる」という確信を持ち、これなら教師として、いや人間として教育の世界でやっていけると思ったからだ。

私たちの仲間には、担任をしたとき、いつも学級崩壊的な状況を招き、担任を持ち上げられず、学年を変わっていく人がいる。3年前に私の学年にいたHさんはそういう人だった。この学年の時、Hさんは初めて同学年で3年間持ち上がり、卒業生を送り出した。

Hさんは、女子の中で起こった仲間はずしをきっかけに、不登校になったA子の問題に直面し、指導困難な状況に陥り、保護者からの不信の声も学年に届いていた。私たちは、この問題を、Aさん個人の指導の問題とはせずに、学年の問題として引き受け、分析・方針・実践と学年全教師で指導に当たった。

もちろん、保護者対応もHさん1人には任せず、なぜこういう事が起きているのか、今どんな指導をしているのか、不登校になっているA子の学習をどう保障しようとしている

のことも含めて説明していき、保護者の理解も得た。最後には、楠さんの論文を引用しながら、この仲間はずしを道徳教材にし、学年で学習した。

体育祭や文化祭などの行事はもちろん、日々の教育活動でも、Aさんがクラスを指導するにはどうしたらよいかを念頭に置きながら進めていった。

「中川さんは、どんな本を読んで勉強していますか」の問いに、竹内常一氏の「自分くずしと自分づくり」を紹介すると、その本以外にも竹内常一氏の本を購入し、偶然その中に出てくる私のツッパリ学習会の実践を読んでいた。

Hさんは、はじめて3年生へと持ち上がったとき、ツッパリ学習会の一端として取り組んでいた自主学習会を、私と2人で切り回し、子どもたちとの関係がどんどん好転し、誰も切り捨てずに卒業させる事ができた。

Hさんは、再び私の学年に戻り、若い同僚に対して、自分の失敗体験を語りながら、どうすればいいかをアドバイスしている。また、私が出した3年前のレジメや教材を事前に配り、『3年前はこうでしたね』と振り返りながら、新しい子どもたちと向き合っている。Hさんは、いまや『K』を軸にした集団づくりの担い手として一緒に頑張れる仲間である。『K』を軸にした学年集団づくりは、教師集団づくりであり、学校づくりにつながる。

先日、ある青年教研に講演を依頼された。「職場では、ゼロトレランスが広がり、『K』を排除する傾向が強まり、問題行動を誘発して、排除しようとする気配さえ感じる。これはおかしいと感じつつも、しかたないと容認している現実がある。なぜ、そこまで『K』にこだわるのか」の問いに、「もし、あなたの隣に排除した『K』が引っ越してきたとき、あなたは隣人としてつきあえますか。」と聞き返した。「自分が引っ越していくでしょう。一市民としてつきあうということは、遠くのここのように感じていたが、今の話しでわかったような気がします。」彼の言葉である。

私たちのいう『K』を軸にした集団づくりは、私たち自身や『K』と共に、平和で民主的な世界をつくる入り口である。ここに確信を持たない限り、『K』を軸にした集団づくりから、心ならずも撤退してしまうことになるのではなかろうか。

「2009年度 京生研基調提案 わたしはこう読む」

岩本 訓典

(1) はじめに

社会の抱える課題は、家庭だけでなく、教育という場にまで大きな影響を与えている。貧困と格差、そしてセーフティネットの張られていないすべり台社会。そして、本来、家庭や地域が担うべき教育の役割さえも学校が抱え込まなくなっている。そして社会の様々な課題は、教室のあちこちに見え隠れしている。

そのような時代に、わたしたち生活指導教員は、子どもの自立に向けて、どのような信念をもち、方法を模索して、実践をつき進めて行けばよいのだろうか。その答えになるのが、京生研の基調提案を初めとする実践や理論にあるのではないだろうか。

(2) 『どんなことがあっても絶対に見捨てない。』

教育現場は、いまだかつてないほどの多忙化の下に置かれている。子どもたちと正面から向き合い、じっくり対話して子どもの課題を読み解いていく時間など無いに等しい現況である。その忙しさの中で、学校から、そして社会から排除されている子どもが増えてきている。それが、京生研の言う“教室の中で最も重い課題を抱える「K」”である。しかし、集団づくりにおいて排除という考え方は、その集団自体を否定することであり、集団そのものを排除することになる。そして、一つの排除が次の排除を生み出し、最後には「自分と関係ないし、どうでもいいわ。」という孤分化が支配することになる。

そうだとするならば、まず真っ先に心に誓っておくことは、『どんなことがあっても絶対に見捨てない。一緒に頑張ろう。』という強い信念であろう。そして、「K」とそのなかまが、ともに、「K」やみんなの願いに向けて歩みだすときに、共闘の世界が広がっていく。

そのためには、「K」へのはたらきかけと、その課題を乗り越えていくための仲間である「集団」へのはたらきかけの両方を行っていく必要がある。それは、「K」への課題に向き合い、読み解いていくと同時に、「K」の課題の延長線上に見える家庭・

地域・社会への矛盾・課題に目を向けて、自己を変革していく過程につながっていく。

(3) 集団の中になかまを

矢野実践で、運動嫌いのA君が学級対抗リレーで一生懸命に走る姿が描かれている。A君が集団に心を開き、ともに頑張れることができたのは、“自分は集団に必要とされている。その中で、みんなのためにできることをがんばろう。”という気持ちがA君にあるからだ。A君が集団の一員として、集団のために頑張れるようになるには、A君から集団への歩み寄りを待つのではなく、集団からA君への歩み寄りが大切だったのではないかと思われる。A君が集団に対して、何の所属感も抱いていないのなら、集団の利益のために、自らが頑張ることは無かったであろう。A君を理解できるなかまが集団にいてこそ、彼は集団の中に入っていたのかもしれない。そして、今年度の基調が、「みんなはひとりのために」を先に記述してあるのは、集団から「K」への歩み寄りが先に必要だからかもしれない。

(4) 学級の要求に基づいた活動を

今年度の基調がくりかえし強調しているように思えるのは、「個人指導と集団指導の統一的展開」である。個人指導に傾斜した傾向があると、以前の基調で述べられていたが、私はその成果として、個人指導と集団指導の統一的展開の再確認に行き着いたのだと思う。集団指導を視野に入れた個人指導であり、個人指導を視野に入れた集団指導という解釈をした。その中で、細田実践に見られるように、「K」を支える仲間の出現が「K」への居場所づくりのスタートになっていくという点を重視したい。なぜなら、教師がどれだけ「K」への共感をみんなに求めても、『やっかいもの』として排除の対象になっている「K」への共感はとてもむずかしい。

まずは、「K」に共感できる仲間を学級に作り出していくことが大切である。そのためには、学級の中で、行事や学級クラブなどの『学級の要求に基づいた活動』（以下、『学級の活動』）を抜きにしては語れない。基調の中には、“トラブル指導が「K」の一見否定的で理解しがたい行動、そのままでは排除の意識を生む行動の中に、彼へ

の肯定的理解を作り出す指導であるのに対して、学級内クラブは「K」をその肯定的な姿のまま理解させていく取り組みだといえる。”と記されている。それは、『学級の活動』を打ち出していく中で起こる様々なトラブルの指導や「K」への自己変革に迫る指導を繰り返すことで、集団づくりは一步一步進んでいくのだと言える。藤木実践の劇指導はそのことを物語っているように思う。

(5) 終わりに

競争と抑圧、「K」を排除しようとする指導が主流を占めている学校現場で、「K」を中心におき、軸とする集団づくりは、並大抵のことではないと思う。それは、「K」だけでなく、集団すべてを変革の対象に捉え、さらには、学校をも変革の対象に捉える必要がある。ともすると、教師自身が排除の対象にされかねないという危険を冒してまでも、立ち向かっていかねばならない。その揺るぎない決意を持ち続けることが、私たち生活指導教師の生き方であり、それを支えてくれる仲間を大切に、サークル活動を展開していきたい。